
真・恋姫十無双 紡ぐ者・誘い人

楽求 一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 紡ぐ者・誘い人

【Nコード】

N3111T

【作者名】

楽求 一文字

【あらすじ】

世には常にイレギュラーがある。

この物語の主人公もまた、その外史にとってのイレギュラーであった。

彼の目的はある男の審査。男がその世界にいるべきか否か。

さて、この外史は一体どうなる事か・・・少し覗いてみましょうか？

プロローグ(前書き)

この作者は真・恋姫無双を持ってません。
だってお金ないモン。

旧キャラだけでもいいよっていう方はどうぞお進みください。

プロローグ

??????

・・・ここは・・・どこだ・・・？
・・・体が・・・動かない・・・。

俺は・・・誰だ・・・？

目が開く。

体は動かないが、目は動かせるようだ。

霞んだ視界に、一面の紅。

どうやら、部屋の中にいるらしい。

「・・・起きた？」

隣から女の声がした。

視界が霞む目玉だけを動かし、声の元を探す。

「おはよう。歴史を紡ぎ、人を誘う者よ。」

声の主は、小さな女の子だった。

体は麻痺していただけなのか、徐々に動かせるようになって来た。

動かせる様になったばかりの首でその少女を見る。

ぱっと見は年端も行かない少女のようだ。しかし、その体から発せられるオーラは容姿に不釣り合いなほど強いものだった。

歴史を紡ぐ・・・？死に誘う・・・？

一体何言ってるんだ・・・。

「・・・意外って顔してるわね。何？アンタ自覚無いの？」

困惑する俺の顔を見て、少女は落胆したような声を上げる。

「・・・口も動かせるな・・・話してみよう。」

「あ・・・」

「あ、まだ動かないほうがいいわ。肉体の構築がまだ終わってないから。」

「・・・肉体の構築？意味が分からん。」

腕と足が動くようになったので寝転んだ体制から身を起こす。視界もハッキリとしてきた。

その様子を見て、少女は満足そうな顔をする。

「うんうん、体動くみたいね。よかったよかった」

「・・・あー・・・あー・・・」

「・・・声が出る。」

「いろいろ・・・聞きたいことがあるけど・・・先に一つだけ・・・聞かせてくれ」

「うん、何かな？」

少女はその容姿に相応しい、純粹無垢な笑顔で答える。

少女のほうを見やると、フリルの着いた派手なドレスに黒色の長髪。さながら、物語や漫画に出てくる魔女のそれに似ていた。

「ここは・・・どこで、俺は誰なんだ？」

「場所に関しては答えられない。でも、貴方の事なら話してあげられる。貴方の名前は禾閻禪正^{かえんみつまさ}。貴方は現世で罪を犯し神は貴方を罰した。けれど、私は貴方の所業が気に入ってこの場所に召喚した。」

・・・罪？罰？

・・・あ、思い出した。

「・・・神が罰したって・・・まさかとは思うが、道端で貰った聖書ブン投げて川に落としたのがそうなのか？」

「ええ、見事に神への冒瀆として見られたみたいね」

・・・マジですか

啞然としている俺をよそに、少女は部屋の中央にある一脚しかない真紅の椅子に座った。

少女が座ると同時にどこからも無く、ティータイムの準備がすっかりしてあるテーブルと、椅子がもう一脚現れた。

「お茶にしましょう。アップルティーは飲める？」

「あ、ああ・・・」

いつの間にか立てるようになっていたので立ち上がり、10歩ほど歩いて椅子に腰掛ける。

「にしても、やるじゃない。聖書を投げ捨てるなんてぞ。」

「・・・俺の家は神道だからな。」

我ながら理由になつてない。
でもまあ、キリスト教を好いてないのも事実だしな。

「……シントウ……日本やほかの一部地域で信じられている宗教ね……」

少女は紅茶を啜りながら、思い出すように呟いた。
それに倣い、俺も一口飲む。

「……美味しい。」

「そう、貴方の口に合ったのなら何より。そんな事よりも禪正。」

手に持ったティーカップを置き、少女が切り出す。

「貴方、三国志に興味ある？」

「……魏・呉・蜀の三国の？……確かに、興味ならあるけど……」

「もし、その世界に介入できるとしたら？」

「……面白いだろうね。」

「よし、試験は合格。」

「は？」

試験って……三国志好きかどうか聞いただけじゃないか。

「貴方に一つ、面白い仕事があるの。」

「・・・仕事？」

「ええ、とある世界の、ある男を審査をしてほしいのよ。」

また突拍子な。

呆然としている俺を尻目に、少女は楽しそうに話を続ける。

「勿論、ただでとは言わないわ。その世界へ行く際に、一つだけ特殊な能力をつけてあげるわ。」

「・・・例えば死なくなったりとか？」

「あら、不死身は駄目よ。面白くないじゃない。」

「・・・さいですか。」

聞いた俺が馬鹿でしたよ・・・。

「・・・今、何か失礼な事考えたでしょ？」

少女は強いオーラを発しながら、どこから取り出したのか槍のようなものを握り締めていた。

「うんにゃ別に」

「・・・迂闊な事考えないでござい・・・。

「・・・そう。ならいいわ。」

次は無いと目で語り、少女は槍をテーブルに立て掛けた。
・・・ははぁん、まだ疑ってるなこの野郎。

「で、その世界での特殊な能力は何がいい？」

このガキ・・・人の意見聞かずに話を進めて

「何？」

少女が俺に槍を突きつける。

「・・・すまん、なんでも無い。」

「・・・そう。」

喉元に突きつけられていた槍が離れる。

・・・逆らわないほうがいいと改めて実感。

「・・・で？決まった？」

「ああ、出来るなら陰陽術とか妖術とかそんなものもいいね。」

「向こうで言う道術みたいなもの？」

「多分そう。」

「なら問題ないわね。・・・さて、準備も出来たし早速行って貰うわね。」

少女が人差し指を回し、呪文のようなものを唱える。
それを聞いていくにつれ、俺の意識が朦朧として、深い、闇のよう
な物に沈んでいった。

プロローグ（後書き）

次回更新は現在進行形（笑）

1話 賊

「あ、そうだ言い忘れてたわ。貴方、そっちの世界では姓を「壇」名を「零」真名を「五堯」と名乗りなさい。」

・・・つてか、審査つて何すればいいんだ？

「貴方の好きにすればいいわ。でも、今までの記憶が無くなるから気をつけてね？」

んな身勝手な・・・

「今から貴方が行くのは三国志初期の世界。と言っても、貴方の知ってる世界とは少し違うわ。」

おいちょっと待て、それってどういう

呉付近・荒野

気がつく俺は何処かも分からぬ荒野に立っていた。

俺の名前は壇零。生まれは・・・思い出せない。

何か大事な事があった気がする。だがそれも思い出せない。

ふと、自分の服装を確認してみる。

濃紺の上下衣。その上に黒のマント。

傍らには刃が剥き出しの両刃鎌。近くには刃を包むための物なのか、包帯が置いてあった。

どことなく『死神』を連想させる服装。

「・・・とにかく、町を探して情報を得ないと・・・。」

傍らに置いてあった鎌に包帯を巻いて左手に持ち、マントを頭にかぶり荒野を当ても無く歩き出す。

鎌の重さは気にならなかった。いや、むしろ体の一部のような感覚までさえした。

こんなときでも食欲というものは湧くもので、俺の腹は得も知れぬ空腹感で満たされた。

食糧確保のためにも早く町を見つけないと・・・。

景色の変わらない荒野を歩いていくと、部隊のようなものが見えた。それは馬に乗っており、すぐに俺の周りを取り囲んだ。

「おう兄ちゃん。ちよいと待ちな。」

壇零の目の前に現れた中柄の男。

そいつの両サイドには小柄な男といやに大柄の男が馬に乗っていた。周りには2、30人ほどの武器を持った男たちが、顔をニヤつかせながら己の得物を構えていた。

・・・どうやら賊らしい。

「・・・何か御用で？」

空腹で恐怖感が薄れていた。

人を刺し殺せる凶器を目の前にしても何も感じない。

「何、簡単な事よ。ちよっと金目のモン出してくれりゃ命だけは助けてやる。」

「……無いと言ったら？」

「兄ちゃんの体が幾つか分かれる事になるだけだ。」

「……金目のものは、無い。」

「そうか、そりゃ残念だ……。オイ！オメエら！やっちまいな！」

男の掛け声とともに、取り囲んでいた賊たちが一斉に壇零に向かって馬を走らせる。

槍の先端が壇零に突き刺さろうとしたその瞬間。

突如、端麗の姿が消えた。

「なっ!？」

賊たちは急いで馬をとめ、辺りを見回す。

「どこに行きやがっ」

賊の一人の言葉が終わらない内に、その賊の側頭部に鎌の柄が直撃する。

さらに壇零は振る勢いを止めずにそのまま4、5人の賊に鎌の柄を当てる。

他にも突っ込んでくる賊たちを次々と鎌の柄で薙ぎ払う。

「てめえっ……!」

賊のリーダー、最初に壇零に話しかけてきた男が両サイドの二人と共に直進してきた。

それに気付いた壇零は馬の足を柄で殴る。

馬は痛み能耐え兼ね、乗っているリーダーの男を落とした。

「クソツ・・・！」

落ちた男は気を失ったようだった。

しかし、それを確かめる素振りも無く壇零は地面を蹴った。

浮き上がった体を思い切り捻り、鎌を振るう。

鎌の柄は吸い込まれるように、二人の側頭部に当たった。

「ガハツ・・・」

「グエツ・・・」

二人は馬から落ち、気を失った。

「な・・・何だあいつ・・・」

残った一人は、仲間をいともたやすく倒した目の前の青年への恐怖でその顔を歪ませた。

しかし、その歪みはすぐに恐怖から痛みに変わり、地面へ崩れ落ちた。

「し・・・死神・・・」

最後の男はそう呟くと、気絶した。

「死神・・・」

壇零は今自分に向けられた言葉を反芻し、その言葉を手がかりに記憶を探していた。

しかしそれで何かを思い出さずも無く、すぐに空腹が思考を埋め尽くした。

「あ、やべえ・・・」

気付いた時、壇零はその身を荒野に投げ出していた。

空腹のまま動いた事を後悔しつつ、壇零の意識は白濁としていった。

1話 賊(後書き)

「飯はきつちりと食へませじょう。」

2話 呉城

呉

白濁していた意識がはつきりとしてくる。

起き上がりふと周りを見回すと、目に映ったのは荒野ではなく豪華絢爛な部屋。

・・・何処だ？此処。

俺、確か荒野に倒れていたはずだよな・・・。

これは夢？死にかけてる俺の夢か？

試しに自分の頬を抓ってみる。・・・痛い。夢じゃない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お？・・・扉の所に誰がいる。

・・・小さい女の子？

「・・・・・・・・よっ。」

片手を挙げ、軽く挨拶を試してみる。

「・・・冥琳様ー！賊が起きましたー！！」

「ちよっ・・・・・・・・！？」

開口一番賊ってどういう事！？

壇零が呼び止める前に、少女は扉を閉めて行ってしまった。

部屋に取り残された壇零は一人呆然と、閉まった扉を見つめていた。

「・・・・・・・・」

と、とにかく俺の疑いを晴らさない!

ベットから降り、少女の後を追って急いで部屋を出る。

扉を出て真っ先に目に飛び込んできたのは綺麗に手入れされた庭。

「ほう、こりゃ見事……って、そんなこと言ってる場合じゃねえ
!」

あの娘が向かったのはどっちだ!?

どこ見ても立派な廊下が続いて……ってうわっ!?

走り出し角を曲がるうとした瞬間、綺麗な女性にぶつかりそうになり慌てて一歩飛び退る。

「あら、本当に起きたのね」

「本当って……私の言葉を信じてなかったんですか冥琳様!？」

「……そんな事より」

「冥琳様!？」

話を逸らされた事にショックを受ける少女。

そしてそれをまったく気に留める様子も無い女性。

「貴方、ちょっと来てくれる？」

「え、はぁ……」

そういうと、女性は踵を返して元来た道に戻っていく。

その後ろを少女が遅れないように懸命に付いて行くのに倣って歩く。
・・・あれ、俺の武器が無い。

「あの・・・」

「何？」

女性が足を止め、こちらに振り向く。

「俺の武器は・・・？」

「今から行く所にあるわ。」

女性は素っ気無く返答すると、また歩いて行く。
・・・今から行く所って、まさか処刑台じゃないよな・・・。
背中に悪寒が走るも、黙って女性に付いて行く。

「じいよ。」

辿り着いたのは何の変哲も無い扉の前だった。
女性が扉を開くと、そこには大きな机と幾つかの席。
客間、と言うよりはむしろ食堂に近いその部屋には兵士が数人配置
されていた。

「座りなさい。」

「は、はあ・・・」

女性の言葉に従い、近くにあった椅子に座る。

女性はちょうど壇零の対面の位置に座った。

「今食事を持ってこさせるわ。」

そう言つて女性が手を鳴らすと、給仕らしい人達が料理を次々と運んでくる。

運ばれてきた料理は、どれも高級そうな料理ばかり。

「食べなさい。」

「……こんな高そうな物、頂いてもいいんですか？」

「ええ、構わないわ。」

「では、お言葉に甘えさせて貰います。」

……一通り食べ終わった後。

「……この鎌、貴方の得物ね？」

そういつて壇零の鎌を兵士に持つてこさせる。

壇零は鎌を受け取り、包帯を取り傷が無いか確認する。

「……よかった。」

傷が無い事が分かり、ほっとする。

「その金属は何？折角だから研いであげようと砥ぎ屋に持つていったら驚かれたわ。」

「……分かりません。」

「持ち主が分からないってどういう事なのよ……。」
女性が呆れた様に呟いた。

「すみません……。」

「まあ、そんな事はいいとして。率直に言わせて貰うわね。」

「何ですか？」

「あなた私に、いや呉の国に仕えてみる気は無いかしら？」

そう言っただけで笑う女性の目には、何かしらの余裕とある種の野心の炎が見えた。

「……実を言うと、さっきの賊との戦闘、見させてもらっていたの。」

「……なるほど、あの時の気配は貴女達のものでしたか。」

「……気付いていたの？」

「ええ、敵意は無くとも気配は気配。読み取る事は容易いものです。」

「……益々気に入ったわ。」

女性はにやりと笑い、端麗を見つめた。

「それは至極光栄。」

「私の名は周瑜、字は公瑾。重ねて言うわ、私達呉に仕えてみない？」

「・・・周瑜殿、せっかくの勧誘申し訳ないが、俺は貴女達に仕える気は無い。」

「・・・貴様！」

後ろにいた兵士が槍を構え走ってくる。

壇零は立ち上がり一步前へ進む。

出した足が地に付こうとした刹那、端麗の姿が消える。

「なっ・・・!?!」

いつの間にか壇零は兵士の後ろに回り込み、包帯が巻かれたままの自身の得物を首に突き立てていた。

もし包帯が無ければ、後一步でも端麗が動こうものなら兵士の首が飛ぶ状態。

しかも槍は煙を上げて刃と柄の一部が無くなっていた。

「道術・・・!」

「・・・ほら、兵士ですらこの強さだ。そんな国に、俺は仕える気は無い。」

そう言うと壇零は兵士から鎌を離し、自分の席に戻った。ギシッという音を立てて椅子が軋む。

「……だが、貴女には一宿一飯の恩がある。今耳にした情報によればこの国は近い内に幾つかの国と合同し城をお攻めになるとか。」

「ええ……」

「なら、俺もその戦に呉軍として参加致しましょう。呉国きつての軍師、周楡殿。」

「……」

周楡はこの壇零という男に少なからず恐怖していた。しかし同時に、この男が軍に入れば大きな戦力なる、と確信を持っていた。

「貴方に来て欲しい方がいるわ。」

「……?」

「この呉国の王、孫権に。」

2話 呉城（後書き）

扉のところに行った少女は小喬です。

3話 出陣

前話より数日

壇零を含む呉軍は洛陽で悪政を強いているという董卓を討とうとする勢力、反董卓軍に参加し、連合が布陣を敷いている地区にいた。そして今、呉軍を率いる孫権は連合の主軸となる有力者達との軍議に出席している。

呉軍陣地・兵舎付近

「なあ周楡……」

「何……?」

「アンタ、少し急ぎすぎてないか?」

「……何が言いたいのかしら?」

壇零は孫権に会い、この戦いに参加する事を話し、呉がなぜ国を大きくするか理由や孫権の過去を聞いた。

壇零は孫権の過去を聞くにつれ、一つの確信が生まれていた。

この国の兵士が「弱い」理由

それは、国の王と部下の意思が同じでない為。

王はこの国が守ればそれで良いと願い、部下は霸道を進もうとする。

目的の見えぬ国に兵は惑い、士気が下がる。

「……何も急いでないわ。」

「……そうか、ならいい。」

その時、孫権が軍議から戻ってきた。

「おう、軍議どうだった？」

「……貴方、分かって言っているでしょう？」

孫権は溜息をつきながら答える。

「……まあな。あの袁紹とか言うのが統率者なんだろう？」

「……ええ、建前上はね。」

「……にしても、あの天の遣いとか言われてた男……」

「北郷一刀の事？」

「ああ、あの男、なかなか面白そうだ。少し挨拶に行ってもいいかい？」

「……好きにしなさい。」

「とつぎ。」

壇零はそう言い残すと、北郷軍の陣地へと足を向かわせた。

「間者はどこに放つ？」

「？水関と虎牢間ですね。・・・城の内部に進入するのは・・・」

お、いたいた。

あの娘たちに訊けば分かるかな？

「どうも、北郷軍の陣地はここであつてるか？」

「ひゃわあ！？」

近くにいた金髪の少女が飛び上がる。

と、同時に黒髪の少女が壇零に己の得物を突きつけてきた。

「貴様、何者だ！？」

「ちよちよ、ちょっと待った！俺は怪しいもんじゃない！」

「そんな見るからに格好をして怪しくないとは、少し無理があるのだ。」

いつの間にか後ろには赤髪の少女が俺の首筋に槍を向けている。

進退窮まるつてのはこういう事を言うんだろうなあ・・・。

左手の武器を放し、両手を挙げるも二人は武器を壇零から離さなかつた。

金髪の少女はと言うと、よほど壇零に驚いたのかはわはわ言つて才口オロしている。

北郷が金髪の少女を宥め、大慌てでこちらへ向かってくる。

「愛紗！鈴々！とりあえず武器を下ろして！」

「……分かったのだ……。」

鈴々と呼ばれた少女は、しびしびながらも壇零の後ろ首から槍を離す。

「鈴々！？……ですがご主人様！もしこの者がご主人様の御命を狙う不届き者なら……！」

「なら声なんか掛けずにすぐに首を刎ねてるよ……。」

「貴様ツ……！」

愛紗と呼ばれた黒髪の女の子は手の槍をさらに壇零に近づける。

「愛紗！」

「ですが……！」

「彼の言う通りだ、もし本当に俺の命を狙ってたなら後ろからでも切り伏せれた筈だし。俺を斬るための武器も持ってないだろ？」

「……ご主人様がそう仰られるならば。」

そういつて、愛紗という少女も槍を壇零から離す。
……助かった。

「助かったよ。……アンタが北郷一刀さん？」

「ああ、そつだよ。貴方は？」

「俺は性を「壇」、名を「零」。今は呉軍に所属させて貰ってる。」

「今は？」

「ああ、俺はまだ誰に仕えるか決めたわけじゃない。言うなれば・
・様子見と選定だな。」

「・・・・・・・・」

「そつだ、アンタにも一つ試験をさせて貰おう。」

「試験？」

「なあに、簡単だしすぐに終わる。」

そつ言つて壇零は懐から木片を取り出し、宙高く放り投げた。

3話 出陣（後書き）

明日からテストなんでちょっと更新できないかもです。

4話 自分の役目

壇零の手から離れた木片が弧を描いて落ちてくる。

それが地に着くと同時に、一刀と壇零の周り一帯の景色が歪む。

「なっ……!?!?」

「アンタと俺の周りに結界を張った。これで、俺たちの姿はあの子たちには見えない。……そして、アンタにはこれから少し先の未来を見てもらう。」

その言葉を待っていたかのように木片が光りだす。

一瞬にして辺りは光に包まれ、壇零の目には何も見えなくなる。

……木片は暫く光り続けると役目を終えたのだろう、音も無く崩れた。

「そ……そんな……。」

一刀は何を見たのか、わなわなと震えていた。

そしてそのままガクリと膝をつく。

「……俺がいると、こんな未来が……?」

「……俺はアンタが何を見たのかは知らない。只、どんな未来にしろアンタの見たそれはこの先、必ずとわかっていい程起こりうる未来の一つだ。」

膝をついている一刀に、壇零は足早に近づく。

そして、一等まで後二歩といった所で勢いよく座り込んだ。

「俺がいると、本当にさっきのような未来が・・・？」

「ああ、そうだ。・・・アンタは、例えこの時代が迎えるのはこの未来のみであったとしても、天の御遣いとしての使命・・・いや、あの娘たちを守る意志があるか？」

「・・・俺は」

壇零の問いに、一刀は力強く立ち上がった。

「俺は・・・例え今見せられた未来しなくても・・・愛紗を、みんなを守る。天の身遣いとしてじゃなく、仲間として。」

その言葉を聴いて、壇零は満足そうに笑う。

そしてゆっくりと立ち上がり、指を鳴らした。

すると、歪んでいた空間が元に戻り、景色は一刀の陣地に戻る。

「野暮な事訊いたな。・・・まあ、忘れてくれや。」

壇零は武器を取り、踵を返すと陣地の出口へとゆっくりと歩いて行く。
く。

・・・ま、術の効き目は半刻程で消えるから心配ないか・・・。

「・・・アンタもいい主人を持ったな。この戦いが終わったら、アンタたちの世話になるやもしれんなあ。ま、そんな時はよろしく。」

「・・・え」

途中、壇零は愛紗と呼ばれてた少女にすれ違いざまに声をかけた。

その時

へえアンタ、なかなかやるじゃない。

「・・・誰だ!!」

左手の鎌の包帯に手を掛けながら叫ぶ。

あらあら、命の恩人に向かってその口振りは無いんじゃない？

「ああ？命の恩人？何言ってるんだ。それより、とつとと姿を現せ！」

はあ・・・アンタ、結構な性格してるのねえ・・・。

パチン。

どこからとも無く指を鳴らす音がすると、壇零は見たことも無いような部屋にいた。

壁も、床も、全てが紅の部屋。

「お帰りなさい。」

目の前の椅子に腰掛けた幼い少女が満足そうに壇零の顔を見ていた。

「お前も道術を・・・!？」

「あら？アンタの使ってるちんけな子供騙しと、私の魔法を一緒にしないでくれる？」

そういつて少女はパチンと指を鳴らす。

「うっ・・・!？」

少女が指を鳴らした途端、壇零が頭を抱え蹲った。
手から放たれた鎌がガランと音を立てて真紅の床に落ちる。

「う、あ、ああ、……。」

苦痛の声をあげながら、壇零は徐々に記憶を取り戻していく。

「……思い出した？」

「……ああ。」

未だに片手で頭を抱えながら、壇零……否、禾閻禪正は自分の得物を持ち、立ち上がった。

「……つたく、人使いが荒いぜ……。」

「あら？その割には楽しんでたじゃない。」

「うつ……。」

凶星といわんばかりに、禪正は口を嚙む。

その様子を見て、少女はクスクスと意地悪く笑った。

「……で」

「……あの男があの世界に存在して良いか否か、だったな？俺の
仕事は。」

「ええ。……では、早速訊きましょうか。アンタの持つ、あの男

の評価を。」

「……俺は、あの男があの世界にいることに同意する。」

「その心は？」

「……直感、じゃ駄目か？」

禪正はニヤリと少女に向かって笑う。

少女はやれやれ、とジエスチャーをする。

「……さて、次は仕事ではなく、アンタにとっては試練のようなものになるわね。」

「……董卓軍の討伐、か？」

「ええ、あの戦いが終わればまた次の仕事に移ってもらっわ。」

「……なるほど、今回の仕事は只の様子見……って訳か。」

「そう言うこと。じゃあ、行ってらっしゃい。」

「ああ。」

少女は、最初に禪正を送った時と同じ手順で魔法を唱えた。

そして、光正の意識は徐々に、だが確実に向こうに戻っていった。

4話 自分の役目（後書き）

真が手に入ったので、次々回辺りからそのネタを入れていこうかと思えます。

5話 突出

白くなっていた景色が色付いてくる。

「……さっきの声は一体……」

そう考えながらも、壇零は北郷軍の陣地の門を抜け、呉軍の陣地に向けて歩き出した。

「お、袁紹の所から伝令が走ってる。なら、ウチの陣地にももう伝令が来てる頃だな。」

壇零は歩くスピードを速め、呉軍の陣地に入った。軍の将達はどうやら軍議の途中のようだ。

「すまん、遅れた!」

「……遅いぞ、壇零。」

足早に入ってきた壇零を見て、孫権が溜息を溢す。

「悪かったって……。で、作戦は?」

「……全軍突撃。」

「ああ!?!」

今度は、周楡が溜息を漏らす。

「……あんの単細胞め。」

思わず口についた言葉を呟く。

「……………」

仮にも総大将である人物に対しての暴言に誰も何も言わない所を見ると、少なくとも軍議に参加している将達は同じ事を考えていると見えた。

「…………まあいい。で、先棒は誰なんだ？」

「…………まだ、決まってないわ。」

ま、そりゃこんな猪戦法での先棒なんて自殺行為。誰も行こうとはせんわな。

…………ここは一肌脱ぎますかねえ。

「なら、俺が行こう。」

「な…………!？」

「この戦法なら、客将である俺が出て行ったほうがアンタ達の軍の被害が少ない。違うか？」

「…………そうね。」

「なら、決まりだな。」

そう言うと、壇零は鎌の包帯を解き始め、その両刃を太陽に晒す。

「…………でも、そんな事をすれば貴方の身が危ないわよ？」

周楡が心配そうに声をかけた。
しかし、壇零は周楡の言葉が聞こえないかのように鎌の包帯を解いていく。

「……これでよし。」

壇零は包帯の取れた鎌を見て、満足そうに頷いた。

「にしても、こんな美女に心配されるなんて俺の人生も捨てたもんじゃねえなあ。」

その言葉を聴いた途端、周楡の顔が少し赤くなる。

へらへらと笑いながら、壇零は陣地の出口へと向かって歩き出した。

「……どこへ行く気？」

「善は急げって言うだろ？」

「まさか単身で突っ込んでいく気！？相手は3万の兵士と董卓軍の猛将、華雄よ！？」

壇零のあまりの無謀な行為に、孫権も止めに入る。

「猛将結構。逆に腕が鳴るぜ。」

歩きながら、壇零は鎌を持っていない右手を振る。

そして一度かがんで屈伸や伸脚、一通りの足の準備運動を手早く済ませ、一気に走り出した。

？水関・城内

「華雄様！敵地より、突出する一人の男を確認。凄まじい勢いで向かってきます！」

「愚かな者もいたものだ。・・・ならば、その愚かさの褒美に我が軍全員で相手をするでしょう。・・・皆のもの！これより軍を離れ、一人猛進する愚かな雄猪を止める！愚かな猪に拳を加えてやろうではないか！」

華雄が大声で兵士たちに命令する。

「ウオーーーーーッ！」

兵士たちが雄叫びを上げ、？水関の門へ走っていく。

「・・・で、その突出している男というのは、一体どこの軍勢だ？」

「・・・それが、顔は黒い外套に包まれており確認できませんでした。・・・。唯一判っているのは、武器が鎌という事ぐらいで・・・。」

「そうか。では、我等も猪退治に赴こうとしよう。」

「ハッ！」

？水関・城外

「・・・来やがったな。」

情報の通り、3万は下らない数の雄叫びが門の向こうで聞こえた。壇零は構え尾両手で持ち、自分の使い易いように構える。

「さあて、久しぶりに躊躇い泣く暴れるとしますかねえ。」

そう呟いた瞬間、？水関の門が開き夥しい数の兵士がなだれ出てくる。

兵士たちは壇零を殲滅せんために、出てきた勢いをそのままに砂塵を巻き上げながら壇零へ一気に突っ込んでいった。

5話 突出（後書き）

次回から戦闘ですね、腕が鳴る。

6話 戦闘

「軌道が甘い。」

そう言いながら、壇零は四方八方から来る敵の刃を片手で鎌を使い、軽くいなす。

そして、いなした勢いをそのままに体を回転させ、得物で周囲を薙ぐ。

「クソ・・・ッ!！」

壇零の周りに取りついていた兵士たちが押し戻される。

「おいおい、こっちはまだ攻撃らしい攻撃はしてないぜ?」

「ッ・・・!! 舐めるなあ!!！」

一人の兵士が壇零の挑発に乗り、剣を振りかざして斬りつけて来る。壇零はそれを片手のまま鎌の内刃で受け止め、そのまま鎌の背を蹴り兵士に突き刺した。

「ぐあ・・・ッ!！」

鎌は兵士を貫通し、腹部に細いひし形の風穴が開く。

壇零はそのまま上に振り上げ、兵士の腹部から上を裁断する。

「ひいッ!！」

隣にいた兵士に血がかかり、悲鳴を上げる。

壇零はその隙を逃さずに、的確に兵士の首を鎌で刈った。地に首が落ち、主を無くした胴から血が噴出し、周りの兵士たちに雨のように降り注ぐ。

「し……死神だ……！」

兵士の一部に動揺が走った。

壇零は尚も向かってくる兵士を次々と斬り伏せていく。ある者は首を、またある者は腕をと神速の速さで振るわれる鎌に、為す術も無く斬られていった。

董卓軍・本陣

前線に向かっていた伝令が腕から血を流しながら本陣へと戻ってきた。

「か、華雄將軍！！黒外套を羽織った男は以前抵抗中！！前線の兵士に動揺が！！」

「動揺？馬鹿猪一頭に何故動揺が走る。」

「そ、それが……あの男、八方を兵士に囲まれても軽く薙いでしまったと……！」

「なッ……?!?!?」

常人では有り得ない報告に、華雄は戦慄した。

「どございませう……！」

「……ッ！例えどんな輩にも我が軍が負けるはずは無い！……このまま本陣を前線部隊の位置まで移行、数で抑える！！」

「ハッ！」

前線

「ぎゃあッ！」

逃げようとする兵士の背中に壇零の鎌が突き刺さる。すでに、あたりには死体の山が築かれ始めていた。

壇零の顔を覆うフードは浴びた血が乾いて焦げ茶色になり、鎌からは鮮血が滴り落ちていた。

その姿、正に死神

「……来たか。」

壇零はポソリと呟くと、敵が逃げていく方に目をやる。少し遠くに砂塵が見え始めていた。

「本隊が来たぞー！！」

「よし、これでこの化け物にも勝てる！！」

本隊が合流しに来たのを見て、兵士の士気が一気に上がる。しかし、本隊が向かってくるのを見ても、壇零は焦って額に汗を見せる事はなかった。

「そりゃあどうかな？こっちも援軍が来たみたいだ。」

自分の後方を見てみると、孫の旗を掲げた軍隊がもう間近と迫ってきていた。

その様子を見て、前線部隊は顔の色が変わるほど戦慄した。

「き、貴様・・・呉軍だったのか。」

「今はな。」

「クソツ・・・！とにかく今は本隊と合流する！皆、退却だ！！」

士官の合図と共に董卓軍の兵士たちが本隊に向けて戻っていくと、同時に呉軍の軍勢が壇零に肉薄した。

「壇零！無事か！？」

呉軍の大将、孫権が声をかける。

「よお孫権。遅かったじゃないか。」

「お前が何も考えず突っ込むからだろう！？・・・！！」

「悪い悪い。」

孫権は壇零を怒鳴りつけるも、その顔は怒っていない。

むしろ怒鳴った直後に見た、壇零の築いた死体の数々に戦慄する。

壇零は肩を窄め、鎌を持ったまま両手を挙げた。

「まあ、前線部隊はほぼ壊滅状態だ。向こうさんはまだ抵抗する気らしいが・・・どうする？」

そう言いながら自分の得物についた血糊を懐に入れてある布で拭う。

「このまま後退する。」

「はあ！？孫権、アンタ何考えてんだ！？今こそ迎撃するべきだろ
う！」

「後曲にいる北郷軍に動きがあった。このまま囷にして華雄を討ち
取ってもらおう。」

甘寧が淡々と、呟くように答える。

「囷って……いや、その前になんで北郷軍が出て来るんだ！？」

「おそらくは……」

「……あんの馬鹿娘え！状況判断、いや基まともな軍事判断も出
来ねえのか！！」

「とにかく、私たちは一旦下がるぞ。」

甘寧が壇零に退却を促した。

「嫌だね。」

「……壇零！」

周楡の言葉を見殺し、壇零は鎌を握り直し臨戦態勢に入る。

「この時だけとしても、共に戦ってる仲間に敵を丸投げするってえのは性にあわねえ。俺はこのまま北郷軍を援護する。」

「……いい加減に」

「やめろ、公謹」

壇零を止めようとする周楡を孫権が手で制す。

「ですが……」

「壇零、お前は何を言っても聞く気は無いだろう？」

「このまま退却する……てえのは聞くつもりねえな。」

「……そうか、ならば好きにするといい。」

「だけど蓮華……」

「……退却するんだろ？早くしねえと機を逃すぞ。」

「……ただし壇零、無事に帰って」

「おっと、それ以上は続けなくてもいい。大丈夫、あんな寄せ集めの軍に負ける俺じゃない。」

「……そうだな。では、武運を。」

「武運を。」

そう言い終えると、孫権たちは退却を始めた。それを見送り、？水関へ向き直る。

すでに董卓軍は合流を終え、今にも突撃せんとしていた。

「ここは私にお任せを。・・・行け、鈴々！」

ふと、後ろから聞き覚えのある声がした。

振り返ってみると、北郷軍も退却を始めていた。

・・・ま、妥当な作戦だ。殿にいるあれは・・・関羽か。一人よりも二人のほうが戦いやすいな・・・。

「おーい!!！」

壇零は踵を返して関羽隊の方へと走る。

その途端、壇零の後方にいる董卓軍に向かって矢が雨のように降り注いだ。

関羽は壇零に、少し驚いたようだった。

「お前は・・・!!！」

「よっす。元気してたか？」

「・・・お前が来たのは、ほんの数刻前だろう？」

「まあそう言うなって。・・・にしても、ウチの大將がすまない事をしたな。」

「・・・全くだ。おかげで、ご主人様に余計な心配をさせる羽目になっちゃったではないか。」

関羽は少し頬を膨らませてむくれる。
そんな少し可愛らしい関羽に、壇零は笑いを堪えていた。

「……クックツツ……そ、それに関しては本当にすまないと思っ
てる。責任、とまでは行かないだろうが援護させてもらっぜ。」

「……勝手にしろ。……にしてもあの旗……。」

「ああ。華雄將軍直々にお出ましのようだ。」

「……優れた将だと思っていたが、見込みが違ったか……。」

「どっするっ。」

「私が狙うのは敵将華雄のみ。一当てした後は兵を下がらせる。」

「……そうか。んじゃ、俺はアンタが心置きなく殺り合えるよう
に周りの掃除をしておっご。」

「……あ、あの、貴方様は……。」

後ろにいた兵士が恐る恐るこちらに向かってきた。

「俺は姓を「壇」、名を「零」と言う。今から、暫くよろしくな。」

壇零は北郷軍の兵士に手を差し出す。

兵士は最初は畏れ多いと拒んでいたが、最後には握手に答えた。

「では行こうか。……皆の命、私が預かる。」

「応っ！」

「全騎突撃！狙うは敵将華雄の頸一つ！」

「うおおおおおー！ー！ー！」

北郷軍の兵士たちは、地に轟かんが如く大きな雄叫びを上げた。

「へえ、さすがは関將軍。覇気があるねえ。」

「当然だ。私は幽州の青竜刀、関雲長。．．．今しばらく、お前に我が背中を預けよう。」

「あんがとよ。んじゃ、行きますか！」

「ああ！」

関羽が走り出すと同時に、壇零も地を蹴り後に続いた。

6話 戦闘（後書き）

予想以上に戦闘が長くなっちゃった！
たいおorz

7話 死亡

「オイ関羽、ちょっと下がってな。」

「は？お前何を言ってる」

「ま、いいからいいから。」

壇零は関羽を追い抜くと、地面を思い切り踏みつけた。その途端、轟音とともに地が揺れた。振動でこちらへ走ってくる敵の足が止まる。

「なっ・・・！？」

「こんなもんで良いだろ。」

「お前、道術使いだっただのか・・・。」

「これで邪魔者はいない、思う存分やって来い！」

壇零は足を地に付けたまま止まり、追い越していった関羽の背中に声をかけた。

「ああ！」

董卓軍

「ちい！押し切れなかったか。・・・全軍転進！？水関に戻るぞ！」

「逃がさん！」

「ふんっ！」

華雄は目の前に立ち塞がった関羽を、自分の得物で払った。
関羽は青竜刀でそれを防ぐ。

「くっ……！」

「ん？その青竜刀……。ほう、お前が噂の関羽とやらか。」

華雄が興味深い、といったような目で関羽を見る。

「我が名を知っているのか。ならば話が早い。華雄將軍よ、尋常に私と立ち会え！」

関羽は再び青竜刀を構える。

しかし、華雄はそれを無視せんとした。

「ふん。いくら名が高まっているとは言え、寡兵の将を討って何になる。……疾く退くぞ！」

「待てっ！」

「失せろ！」

華雄が得物を振り、関羽の青竜刀を弾いた。

「くっ……！」

「ふつ。また縁があればまた会おう。」

華雄はそのまま退いていく軍に続いて撤退した。

「クソツ・・・！何だ！？いきなり兵の質があがった！？」

壇零は急に強力になり出した敵に押され始めていた。

先程までの余裕は、もはや微塵も無かった。

鎌で敵の槍を薙いでも、その隙を突いてほかの兵の得物が割り込んでくる。

「壇零！」

前方から関羽が戻ってくるのが見て取れた。

そして、壇零と関羽は合流した。

「おお、関羽か！助かつ」

関羽が来た事に少し安心し、気が緩んだその刹那。

敵の槍が壇零の胸を貫いた。

「カハ・・・ッ！」

突き刺さった槍が引き抜かれると同時に、壇零は力なく膝をついた。

「壇零！？」

「ちくしょ・・・う・・・油断し・・・た・・・。」

手の鎌を杖代わりにそのままの体勢を維持する。
しかし、その手も徐々に力が抜けていった。

「うおおおお！」

壇零の少し前では、関羽が周りにいる兵を薙いでいた。

「関羽……」

「喋るんじゃない！」

「俺の……事……はいい……。お前……は早……くご主……
……人様……のところ……へ戻……りな。」

途切れ途切れに、そして時折血を吐きながら壇零は力無く呟いた。

「そんな事出来るか！お前は……」

「いい……から……行け……！」

壇零が関羽の背を押し、同時に結界を張り関羽を少し離れたところ
まで飛ばし、敵の固まりから抜けさせる。

「壇零！」

関羽はすぐに戻ろうとするが、結界の所為で今いる場所から動く事
はできなかつた。

「・・・さあ・・・最・・・後・・・の剣舞と・・・洒・・・落込・・・
・・・もうか・・・。」

壇零はゆっくりと立ち上がり、鎌を構えた。

そして息を吸い込むと、力強く叫んだ。

「我が名は壇零！！この時この場を最期と定めいざ戦わん！！死に
たい者はかかって来い！！負傷の身なれどお相手いたそう！！うお
おおおおおお！！！」

雄叫びとともに壇零は鎌を横に薙いだ。

「ぐわっ！」

「ギャッ！」

敵兵は数人倒れるものの、一向に減る気配は無い。

真後ろにいた兵が壇零の肩に槍を突き刺した。

それに続いて周りにいた兵も次々と壇零の体に槍を突き刺す。

「ぐぶ・・・っ。」

そこで、壇零の意識は途切れた。

7話 死亡（後書き）

ちよつと強引だったかな？

八話 己の眼で…(前書き)

PSP版恋姫十無双を購入しました(今更

八話 己の眼で…

「 ……!」

此所は益州国境が近くに有る城の中。そんな街の端に位置する家の壁に凭れかかり、うたた寝をしていた濃紺の上下衣に黒外套を羽織り、鎌を携えた男性がハツとした様子で眼を覚ました。

「 ……夢か。」

男性はそう呟くと、起きた際にズレてしまった外套を肩にかけ直した。

「 ……おい、聞いたか?」

「 ああ、あの声望高い徐州の劉備様が、此所に来なさるそうだ…。」

「 これで劉璋の圧政からも…。」

「 だな…!」

若者達が普段とは違い、生気に満ちた顔で通りを歩いて行く。そんな様子を見た男性は、無表情で家の壁から背中を離れた。

「 チツ…浮かれやがって。」

男性が心なしか浮き足立った街の人間達を、ある種の軽蔑を込めて見つめる。

するとその時、人混みの中から一人の青年が男性の元へ走ってきた。

「 壇零!長老方がお呼びだ!!!急いで、いつもの集合場所へ行ってくれ!!!」

「…分かった。」

長い距離を走ってきたのか、肩で息をしている青年に返事をして、壇零と呼ばれた男性はその場を後にした。

とある食堂

「…邪魔するぜ。」

「来たか、壇零。」

壇零が食堂の扉を開くと、いつもは所狭しと列べられている机を脇に避けて作られた中央の空間に、一つの円卓が置かれていた。そこには、この街の代表…長老達がそれぞれ座っていた。

「…壇零。知っておるじゃろうが、この街に徐州州牧の劉玄德様が間もなく来られるそうじゃ。」

「…ああ、街のどこに居てもその話題で持ちきりになってる。」

「…お主は、どう思う？」

「…劉備を快くこの城に迎え入れるか、か…？」

「そうじゃ。儂ら長老会は皆賛成した。後は壇零、お主だけ…。」

一人の長老が長い髭をゆっくりと撫でながら壇零のいる方向を向く。

「…好きにすればいいだろう。元々、俺には何の権限も無い。親父も、劉璋の所へ召集されていないんだしな。」

「だからこそ、お主の意見が必要なのじゃ。」

「……………なら、俺は反対だ。」

壇零は少し黙った後、それが至極当然といった風な様子で淡々と答えを出した。

「理由を訊こうか。」

「声望なんか信用出来ない。酷い暴政を強いていたという董卓でさえ、袁紹の濡れ衣だったらしいじゃねえか。」

「じゃが…。」

「俺は、自分で見たものしか信用しない。」

壇零はそう言い捨てると、食堂を出て行くこととした。

「…何処へ行く気じゃ、壇零。」

「今言った言葉通りだ。俺は、この眼で劉備を見定める。」

壇零は目だけを振り返らせ、すぐに食堂の扉を閉めた。

数刻後 城街

長老会の決定通り、劉備を迎え入れる為に城の門は開け放たれ、劉備の元へ使いが送られていた。

「ににさま、めいたちはここでなにするですか？」

「…冥姫^{めいき}、家で待ってなさいと言ったろ。」

「やです！めいはににさまといっしょがいーです！」

「…仕方無いな。」

城街の入口付近の大通り。鈍く光る大鎌を手に持った壇零は先程迄いなかった少女を連れていた。

「…ににさま、おそとにしろないひとがいつぱいきてるですよ？」

冥姫と呼ばれた少女は、壇零の衣の裾を掴みながら劉備を歓迎しようと賑わう見知った人間しかいない街を見つめて呟いた。

「あ、きましたです！」

「人数は？」

「ちよつとです！」

「少し…？使いか何かか。」

冥姫の報告に、壇零が訝しげに顎に手を当てる。

「ににさまににさま、みにいっててもいいですか？」

「…駄目だ。何があるか分からない。」

「むー…。」

冥姫はふてくされた様に頬を膨らませると、再度民衆の方へと眼を向けた。

「でもでも、りゅーしょーのひとたちみたいなの、こわいのがないです。」

「冥姫、俺がいつも言っている事は？」

「…こえにたよるな、そのめでみよ。です…。」

「そう。いくら千里眼でも人の本質を見る事は出来ない…。これはお前の為なんだ。いいな？」

「ぶう…。」

それでも納得していないのか、頬を膨らませ続ける冥姫の頭を壇零は優しく撫でてやる。

『フーーーーッ!』

突然、民衆が歓声を上げた。劉備の使いがきたのだろう。

「…来たか。冥姫、ここで待ってなさい。」

「はーい…。」

拗ねた様な声を出す冥姫の頭をポンと軽く叩き、壇零は民衆の声の中心へと、足を向けた。

八話 己の眼で…(後書き)

感想・ご評価お待ちしております

九話 奇襲と呼べぬ奇襲（前書き）

ちよつと書き足しました

九話 奇襲と呼べぬ奇襲

城街 大通り

「…趙雲様、何だか気恥ずかしいですね…。」

民衆が歓声をあげて偵察に入ってきた趙雲の部隊を歓迎する。

そんな状況に慣れていないのか、趙雲の部隊の一人が頬を掻きながら小さな声で呟いた。

「ふふっ…。それだけ、我が主達の名が広まっているという事だ。喜ばしい限りではないか。」

それに対して趙雲は歓声を意に介さず、平然と民の中を歩いて行く。

(この分なら、桃花様が来られても安心だろう。)

趙雲が劉備達を呼びに行こうと踵を返したその時、ふと民衆の歓声がピタリと止んだ。

「…!？」

と、同時に只ならぬ威圧感が入混みの奥から流れてきた。

それを素早く察知した趙雲が直刀槍を構え、威圧感の根源がであろう方向へ向く。

「アンタあ、何者だい…?」

嫌に頭に響く声が聞こえたかと思うと、街民たちが逃げるように道の真ん中を避けた。

ぽっかりと空いたそこには、星を抜いた夜の帳をそのまま写し取ったかのような黒外套を纏い、自身の身長はある包帯が巻かれた大鎌を手に持った一人の男がゆっくりと趙雲に近づいてきていた。

「もう一度問う。アンタは一体、どこの誰だ？」

「…我が名は、趙雲。」

「へえ…。幾つもの国で『神槍』と名高い趙子龍か…。」

「私も名を名乗ったのだ、貴様の名も教えて欲しいものだ。」

壇零から発される凄まじい威圧感に耐えながら、趙雲は小さく笑った。

「…こいつあ失礼。俺は壇零。一応此所の民草の一人さ。」

「聞かん名だな。おい、すぐに桃花様にこの事を伝えよ！」

「応!!！」

趙雲が声をかけると、すぐ近くにいた兵が城門へと走る。

「ぐあ…っ!!！」

しかし、兵は苦しそうな声をあげると、走り出した勢いをそのままに土煙をあげて倒れ込んだ。

「な…っ!?!？」

「…遅いな。調練が足りないんじゃないか？」

「貴様…!!！」

一瞬追撃を警戒した趙雲だが、壇零がそれ以上手を出して来ないと

分かれると落ち着いて槍を下ろした。

「…劉備は何処だい？」

「そちらがその気なら劉備様ではなく、私が相手をする。…ただ。」

「ただ？」

「なぜ民である貴様が、我等を襲うかを教えてほしい。」

「…なあに、簡単さ。この街がまた前の太守、劉璋の二の舞にならないように…な。」

壇零は外套を脱ぎ捨てると、包帯を巻いたままの鎌を構えた。

「…劉玄徳が声望を、信じられぬと？」

「ああ。俺はこの眼で見たものしか信じない。」

「…いいだろう。劉備が家臣、趙子龍の武を以て我が主の器を知ることがいい！」

言うが早いか、趙雲は大きく踏み込み得物で壇零を縦に薙いだ。

しかし壇零は動く事もせず、槍の軌道の先に鎌の柄を置いて防御する。

「…私の一撃をいとも軽く受けるとは、やるな。」

「謝謝。天下に名高い趙子龍に言われると、感動もひとしおだ。」

二人は互いの武器を挟んで、ニヤリと笑いあう。

次の瞬間、趙雲が鏑迫り合いから離れて一步下がると、引いた足を軸に一回転して壇零に払いを入れる。

壇零もそれに反応し、鎌を地面に突き立て、その勢いに乗って飛び上がった。

そして難なく元の場所に着地した壇零は、直刀槍を動かせぬよう踏みつけ、鎌を引き抜いた。

「…ッ!」

「…勝負、ありだな。」

壇零が包帯を巻いたままの鎌を趙雲に突きつけ、片目をつり上げて笑った。

「…甘いな。得物に包帯巻いてなかったら、その頸が飛んでるぜ?」

「…よく、私が本気でないと分かったな。」

「今まで盗賊相手に使ってきた戦法で勝てたんだ。『神槍』が、そんな弱い筈無いだらう?」

「……………」

「部下がこんななら、劉備も相当だな。…ある意味、安心したよ。」

「…安心?」

「劉璋の大馬鹿なんかと違っつて事だ。…悪かったな、疑っちまっ
て。」

そう言つと、壇零は鎌を下ろし、自分が脱ぎ捨てた外套を拾い先程来た道に戻つていこうとした。

「待て。」

「…何だ?」

「壇零と言つたな。…もし、お主が構わないのなら我が軍に仕官してみないか?」

「…一兵として、アンタの下に就けと?」

「…いや。兵ではなく、将としてだ。」

趙雲の答えが意外だったのか、壇零は趙雲へ振り返った。

「…正気か?俺は只の民間人だぜ?」

「ああ、勿論分かっている。…だがな、お主の腕は埋もれるには勿体無いものだ。是非その力、我等や主の為に振るって欲しい。」
「……………勘違いしてないか？俺はまだ認めるとは言っていない。…まずは劉備を見る。話はそれからだ。」
「そうか…。」
「んじゃ、俺は家に帰るよ。目的の一つは済んだしな。…また、後で会おうや。」

壇零はそう言い残すと、外套の埃を払って纏い直し、その場を後にした。

「ににさま！」
「ただいま、冥姫。」

趙雲と別れてすぐ、壇零は冥姫が待っていた家の角にやってきた。小さな冥姫の手にはまだ湯気が立っている肉まんが握られていた。

「…その肉まんは？」
「えと…いつものおばちゃんがおやつにつて。」
「…お礼は？」
「いいましたです！」

冥姫はその壇零の腰ほどしかない小さな体をぴんと伸ばしながらにこやかに返事をする。

「よろしい。」

「…ここにさま？」

「ん？」

「りゅーびさんって、やさしいんですか？」

「…さあな。」

壇零は冥姫を軽々と持ち上げると、鎌を持っていない肩に乗せてやる。

「」

「さ、城へ行くぞ。」

「はい。」

冥姫が言葉の意味を理解したのかしていないのか分からない返事をする、壇零は呆れた様に小さくため息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3111t/>

真・恋姫†無双 紡ぐ者・誘い人

2012年1月6日03時46分発行